

海老名市立有鹿小学校 学校運営協議会 議事録
(令和7年度 第2回)

- 1 日時 令和7年11月26日（水）9：30～12：00
- 2 場所 海老名市立有鹿小学校 会議室
- 3 出席委員 鍵渡正徳会長 越智正則委員
田中由美野委員、伊藤恵美子委員、北川八重子委員
姫野珠実校長、土谷政巳教頭 宮下翔太教務主任（記録）柴田稜介教諭
- 4 会議の内容
(1) 開会
- (2) 会長あいさつ
鍵渡会長：先日、有鹿幼稚園で飼育していたウサギの「ハッピー」が亡くなり、子どもたちがお悔やみのお手紙を書いていた。以前、有鹿小学校でもモルモットが亡くなったと聞いていたので、子どもたちの反応が気になった。このような機会に、子どもたちには命の大切さに気付いてもらえたらしいと思った。
- (3) 学校長あいさつ
姫野校長：本日は、議事に入る前に2年生の生活科の「町たんけんの発表」をみていただき、その後、休憩をはさんで議事についての話し合いをさせていただく流れで運営協議会を行う。
先ほど会長からあったモルモットの「だいふく」についてだが、最期の方は痙攣等もあり動物病院にも連れて行くことも多くなっていた。亡くなった日も病院に連れて行ったところ、獣医から「もう先が長くない。今の姿を見せることによって子どもたちに『死』について考えさせることも大切ではないか」と話があったが、子どもたちにそのような姿を見せることでトラウマになる児童もいるのではないかという判断をし、病院で最期を看取った。しかし、獣医のいうとおり、「死」という現実にきちんと向き合わせるために亡骸を学校に持ち帰り、お別れの会を開くとともに「だいふく」が最後まで懸命に生きようとしていたことやどのように最期を迎えたかを子どもたちにも伝えた。お別れの会には、子どもたちが折り紙で作った花や手紙を書いて「だいふく」に最後のお別れをする列が長く続いていた。荼毘に付された後しばらくの間、祭壇を設置していたが、子どもたちからの手紙やお供え物などがたくさんあった。

～2年生の教室へ移動～

(4) 2年生による 生活科「町たんけんについての発表会」の参観

(2年生教室：西館2階)

5 議事①「上半期の学校状況、教育活動について」

議事②「児童に係る具体的な課題の協議」

議事③「令和8年度有鹿小学校の 特色ある学校づくり実践事業 について」

姫野校長：今年度も上半期が終わり、大きな事件、事故等がなく子どもたちが健やかに育っていることに地域の皆様や保護者の皆様に感謝している。小さなざこざや児童指導案件はあったが、担任が一人で対応するのではなく、管理職・学年・コーディネーターなど、関係職員でチームを編成し、問題に対応している。

大きな行事もほぼ終了した。先日修学旅行に行ってきたが、丁度インフルエンザが流行り始めた頃で、当日、発熱し参加できない児童が2名いた。また、修学旅行中に集団感染することを避けるために、できる限りマスク着用で過ごすようにした。日光はとても寒くて、奥日光では雪も降っていた。紅葉と雪と一緒に見ることができたのはとても珍しく、情緒のある風景が見られた。

今後の大きな行事としては、1月に「ひびきあう教育実践事業」の発表を控えている。これは海老名市内の小中学校が持ち回りで授業実践を行い、教員の授業力を高めることを目的としていて、本校は3年前から始動しており、今年度が発表の年度である。これまで研究してきた国語の授業を当日は3クラス（2年1組、3年1組、6年2組）が授業公開する。市内はもとより、近隣市の座間、大和、綾瀬に案内文を発出しているところである。

2月6日（金）には学習発表会を予定している。学校運営協議会の方々にもご参観いただきたい。昨年度は体育館が工事で使用できなかったため、各教室でクラスごとの発表だったが、今年は体育館の改修工事も終わったので、以前行っていた学年発表の形にもどした。空調も完備されているので、寒さの影響を受けることなく、快適な環境の中で発表ができる。また、その日は、創立70周年記念事業の一環として記念コンサートも予定している。バイオリン奏者の演奏と講演を1時間目に予定しているので、可能であれば、そちらもご参観いただければと思う。

70年周年記念事業の流れとしては、これまでに有鹿小学校のキャラクター「あるこじか」が決まり、航空写真を撮影したり、三川公園へ行き全校児童でスタンプラリーを行ったりした。教員が企画したものだけで

なく、子どもたちの委員会活動から自発的に70年記念のイベントを企画、実施するなど学校全体で盛り上がりをみせている。

1学期、不登校児童の実態についてお伝えしたが、現状ではクラスに行くことができるようになった子が増えている。未だ、学校に登校することが難しい児童もいるが、フリースクールに通うなど、関係機関と連携をとりながら、学習に取り組んでいる。また、担任が保護者と連絡をとりあい学校とのつながりを維持している。

特色ある学校づくり関連では、地域とのつながりを深めるという目的のもとボッチャやかけっこ教室、陸上クラブなどに地域の外部団体の方に来校してもらい、子どもたちと一緒に活動してもらえた。

柴田教諭：支援級では、12月に海西中学校区でクリスマス会を予定している。

姫野校長：今年は2年ぶりに、せせらぎ祭りにも参加した。

田中委員：今後も、今年の流れでもいいかと思う。事前にリハーサルが難しいならば、当日リハーサルのみでもよい。

姫野校長：今年度は、三川公園の職員の方々に楽器の運搬をほぼやっていただいた。職員の車は出さずに運ぶことができて、大変助かった。

土谷教頭：「有鹿の森」も大変盛り上がった。「有鹿の森」や「全校スタンプラリー」には普段、学校に来ていない児童も参加をしていた。

田中委員：自分は屋外の活動担当だったので、校内の様子が分からなかった。

今年度からPTAからPTCになり、組織が変わったが、「有鹿の森」の運営等に変化はあったか。

宮下教務：今年度から保護者からボランティアを募ってお店を開くという形に変えた。前日準備もほぼ無くし、当日来られる方々だけでも運営できるようになるだけ保護者の方々に負担がかからないようにしたが、問題なくできていたと思う。

鍵渡会長：不登校児童について、「有鹿の森」などのイベントに来るのすごいと思った。そのような子たちは、学校に来ること自体も大変だと思う。それを考えると、勇気をもって来たと思う。

土谷教頭：現在、本校の児童が利用しているフリースクールの所長は厚木で教員をやっていたこともあり、学校と連絡を取り合っている。いろいろなつながりがあり、学校に来ていない子たちも、いつ来ても安心できるように、修学旅行などのグループなどにも配慮して、連絡をとって計画している。

姫野校長：クラスの様子を見ても、その子を思った行動ができるのも素晴らしい感じている。このようなことは海老名のフルインクルーシブ教育にもつながる。先日行った学校評価アンケートの中で保護者からのご意見として、学校のインクルーシブ教育について肯定的な意見が多くかった反面、「何か（行事の際のグループなど）決めるときに学校に来ていない子を優先するのはいかがなものか」「毎日学校に行っている子がどうして我慢しなければい

けないのか」という意見もあった。学校、保護者が一丸となって同じ方向に進むというのがこれからの課題でもある。

伊藤委員：先生方が伝える言葉が、子どもたちの心に残っていればいいと思う。親はその時の環境（自分の子どもの時）で育っていて、さらに自分の子どもはかわいいから先ほどのアンケート結果のような考えになるのは仕方ない。「いろんな人がいるよね」という教育なのだから、いろんなやり方がある。だからこそ難しい。

越智委員：何も言わないで最後にたまって訴えてくるほうが怖いので、アンケートでいろんな意見を出してもらって、学校に伝えてくれるのはいいと思う。

議事②「児童に係る具体的な課題の協議」

姫野校長：今年度の学力調査の結果についてだが今年も全国平均を上回る正答率が多く、当初予想していた結果を超えるものとなった。

鍵渡会長：学力調査の教科は何をしているのか？

姫野校長：国語・算数・理科の3教科と学校・家庭・地域に関する意識調査である。その中では、地域とのつながりに関する回答のポイントが低かった。しかし、学校評価アンケートでは、反対に高いポイントだった。昨年度の学校評価アンケートで地域に関する回答が低いポイントだったことに対し、今年は地域とのつながりを目的とした取組みや教育活動を積極的に発信していくことを取り組んできたので、子どもたちにはその効果がでてきたと思われる。

田中委員：田植えをやる学校は地域とのつながりが強く、学校によって差がある。

有鹿小学校も以前に比べたら地域とのつながりが活発になっていると感じる。

土谷教頭：担任の意識としては、そのつながりは仕事と捉えているのかもしれない。

伊藤委員：先生としては、授業の一環としてのつながりしかないのかもしれない。中新田小学校のように地域の方々と餅つきなど、直接地域の方と触れ合う取り組みなどは、有鹿小学校にはないかもしれない。そうなると先生方にとつては「仕事」という意識が強いかもしれない。

「ふれまち」など地域のお祭りなどは子どもがたくさん来た。お手伝いのPTCの方も来た。保護者だけではなく、子どももボランティアに参加してくれて、太鼓を叩いて盛り上げてくれた。そんな姿をぜひ先生方も見に来てくれるといいと思う。

越智委員：子どもたちもお母さんがお祭りのお手伝いをやるから来たと思う。それも何年か続けると子どもたちが自ら自発的に来るようになる。今年も多方面に渡って、販売など子どもたちが頑張っていた。そのような姿を見て、地元に根付いた行事となっていると感じる。

伊藤委員：そういったことも大事なことだが、先生方も休みは必要。でも地域とのつながりが大切だというならば、そのような場に職員が参加するのもいいと思う。

姫野校長：学校によっては、お祭りに職員が参加しているところもある。

田中委員：以前は学校の先生方がお祭りの時にパトロールをしていた。

北川委員：小さい子などは、お祭りなどで先生に会うのはうれしいと思う。

別件だが、昔、総合の学習の一環で太鼓の指導をお願いされたことがある。

姫野校長：外部団体の方から、「自分たちから学校へ行って、子どもたちに指導をしたい」という声がある。それぞれのクラブなどにとっては、宣伝効果にもなっているようだ。

土谷教頭：どこのスポーツチームも子どもがいないので、子どもの取り合い、勧誘に力を入れている。

北川委員：自治会が絡むと、自治会に入っていないとイベントに参加できないなどのきまりもあり、まだ昔ながらの固いイメージが残っている。昔からのやり方で活動を続けてきた人たちなので、今までのやり方をなかなか変えられない。

伊藤委員：今の若い世代の人たちは、自治会に入らない。

越智委員：自分に役員の仕事が回ってくるのが嫌なのだと思う。

伊藤委員：役員もやってみれば楽しい。自治会など、地域は地域で様々つながりやしがらみがあるのが現状。

議事③「令和8年度有鹿小学校の 特色ある学校づくり実践事業 について」

姫野校長：今年度は、有鹿小学校における特色ある取組みとして、「鼓笛」「インクルーシブ教育」「校内研究」「児童会活動（創立70周年記念事業）」の4つを申請し予算をつけていただいた。来年度の取組みについて、各グループから意見を聴取し、新たに申請を行う。現時点ではほぼ確定しているものは、二つであり、一つ目は「鼓笛」である。鼓笛は有鹿小学校の伝統もあり、子どもたちにとっても大切な活動なので継続して取り組みたい。楽器の老朽化が目立っており、どの楽器も古くなっているので、それらの修理等に予算が必要になる。

もう一つは、「校内研究」今年度の発表で一つの区切りはつけるが、これからも教員の一人一人の授業力向上のために予算をつけていただき、教員の研修や研鑽に費用を当てたいと考えている。

ここ数年にわたり申請している「インクルーシブ教育」についてだが、環境面については整ってきたので、申請するのであれば、講師を招請して教職員の研究や意識向上を図るための予算を要求する。

インクルーシブ教育については、環境面を整えることも必要だが、実情

をからいうと「物」より「人」だと感じている。しかし、これについては「特色ある学校づくり実践事業」としての予算でどうすることもできない。インクルーシブ教育について、皆さまからのご意見を聞かせていただきたい。

鍵渡会長：具体的に何をしているのか？

姫野校長：例えば、一斉指導では学習についていくことが困難な児童に個別指導をしたり、教室内で該当児童に付添ってフォローをしたりしている。他にも、「みんな同じ」「教室をホームに」という考え方から、1年生については通常級児童と支援級児童が可能な限り一緒に空間で学習や生活ができるように教職員を配置し支援を行っている。それに伴い、1年生の教室のならびにリラックスルームを設置し、支援級児童が行き来しやすいようにしている。

田中委員：たしかに環境は整っていると感じる。

鍵渡会長：幼稚園でも補助の先生をつけたりしている。しかし、別室などはない。クールダウンするために廊下に仕切りをつけるなどの工夫をしている。

土谷教頭：どこまでをインクルーシブとするのかが難しい。「一緒」とはどこまでなのかに対して一人ひとり認識が違うと思う。不登校やフリースクールもそれらの「一緒」という考え方に入るのかどうか。海老名市がフルインクルーシブ教育を行っていることで、他市からも注目を浴びている。他市からは、「海老名市には支援級がないのですか」ということを聞かれることがある。

鍵渡会長：インクルーシブ教育の考え方方が、どこに基準をもっていけばいいのか分からぬ。

土谷教頭：クラスの規律、学校の規律など、色々な規準がある中で、何をどこまで守らせなければいけないのか。今は、昭和とは違い「できないから、やらない」という児童に教師から強く言うこともない。

伊藤委員：今は、弱い子は立ち直れない。先生が叱ると保護者からのクレームがくる。どうすればいいのか。

柴田委員：子どもたちの中から変わるといいと思う。支援級の教室と交流に行く教室の物理的な距離をなくすことで支援級児童とのかかわりが大幅に増えている。かかわりをコーディネートしすぎるのではなく、あえて教師が一步引き、支援級児童と通常級児童をつなぐファシリテーター、つなぎ役になればいいと思う。現在、1年生に支援級の児童がいるが、教師がかかわりすぎないようにしている。すると、子どもたち同士で声をかけあって、遊ぶ様子が見られた。

伊藤委員：いろいろな子どももいれば、親もいる。親からの要望も100パーセント応えられないものもある。子ども一人ひとりの特性が違うので、そこに学校が合わせていくのは難しい。

姫野校長：1月21日（水）に有鹿小学校で教育長と保護者とのフルインクルーシブ教育について「対話の場」が予定されている。学校運営協議会の皆様もご

都合がつけばぜひ参加していただきたい。

田中委員：地域との説明会（対話の場）に行ったことがある。色々な立場の人たちから、話を聞くことができた。

姫野校長：柴田教諭が1月に「インクルーシブ教育」を意識した授業を公開授業する予定になっており、海老名市教育委員会の皆さんにも参観していただきたいと要望している。4月からインクルーシブ教育に対して、有鹿小学校がめざしている方向性の確認の場としたい。今回は1年生の実践であるが、この実践をもとに全校（全学年）で取り組んでいきたいが、そのためには人の配置が必要である。

伊藤委員：海老名市のインクルーシブ教育について目標を掲げたのだから、その授業は、ぜひ教育長にも参観してほしい。

姫野校長：学校評価アンケートの保護者からの意見を見ても、インクルーシブ教育についてよくわかっていない人が多いと思う。

田中委員：教師と保護者ではそれぞれの立場でも認識が違うと思う。

6 その他

- ・令和8、9年度学校運営協議会委員について

7 事務連絡

- ・学習発表会について

2月6日（金）学習発表会参観 8：30～体育館にて

- ・次回の学校運営協議会の開催予定について

2月13日（金）10：00～会議室

※2月6日（金）10：00より変更

8 閉 会